No.51

芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
TEL072－681－8870

発行日＊＊＊2010年11月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

ペットに気づかされた事

『可愛いでしょ～』と画像付のメールを家内からもらったのが８月の終わりであった。ヨウムという鳥の雛が居ると言う。我が家にはオカメインコが２羽いて、それでいいだろうにと思っていたが適当に同意しておいた。ヨウムは小鳥とは言いがたい大きさだし寿命も長いそうだ。飼育の仕方も不安だし、と家族の中で話題になりながら、結局、二週間後そのヨウムの雛は我が家にやってきた。

名前をハイジと名づけた。この鳥は娘の話では大変賢くて人間の幼稚園児程度の知能を持つようになるらしい。家内と娘は、可愛い、賢いとヨウムを囲み日々絶賛である。間もなく、私も、これから長く付き合うことになるから（三十年から生きると言う）と、時々餌をやったり手に乗せようと恐る恐る（体長三十センチ以上あるうえ、大きく黒い嘴を持った小鳥ではない小鳥だ）接しだした。すると、確かに、考えて反応する仕方が何となく人間的で、ちょっとした姿が哲学的な雰囲気を感じさせた。意思をしっかりと持った鳥だ。私もヨウムが魅力的で気になりだした。

ところが二ヶ月も経ったころから、ヨウムは私が手をいくらさしだしても乗ろうとはしなくなった。餌をやっても後ずさりして避けるのである。毎朝神棚に水を供えるためにケージの前を通ると、ヨウムはガウガウと大きな声で私を威嚇するのである。正直おもしろくなかった。しかし、家内らに比べれば幾分も世話をしたわけではない。朝晩世話している家内にはかなわないとも思った。それでも、ガウガウ威嚇されると多少傷つくのである。

夜、ハイジは定位置でジュースをもらう。家内が気をまわして「呑ませてみる？」とジュースの入ったオチョコを渡してくれるが、私からのジュースはいらないとオチョコを嘴で押し返す。私の事は見えないよと言わんばかりに背を向け毛づくろいを始める。このヨウムは、家の者は主人である私を立てて当然だという私のおごった気持ちを、賢いゆえに見通してフンと思って近寄らないのか。くそっと思ったが、男だから一家の主だから稼いでいるんだから、家族は自分の思ったようになるべきだという傲慢な自分の一面をペットに気づかされた。

今朝も私を威嚇する声を聞きながら、謙虚に神棚に水を供えている私である。（嘉）

連載　爺捨て山 24

貸店主

病院の近くに住処を移転する老人が多いと聞く。郊外の住宅を売って駅に近いマンションに引越ししてきた人の話を聞くと、坂道が多いし買い物には不便だし足腰が弱ってくると心配だから。駅の近くのマンションだと病院も近いしエレベーターで上が り降り出来るから楽に暮らせると考えてのことらしい。

私は、田舎で育った為か、都会は元気な若者で金が稼げる人にとっては魅力的な場所だが、老いて金を稼げなくなると金がかかり住みにくい所になると思っていたが、そうでもないみたいである。便利さを自然環境の美しさやのどかさ等より優先される人も多いようである。

しかし、私は思うのである。お金を払って医療に救いを求める老後もわからなくはないが、自然に囲まれた田舎で畑仕事などの仕事をしながら過す時間が与えてくれるであろう癒しの空間を捨て去ることは出来ない。

山野の草木や山々が、これまで生きてきた自分の人生が抱え込んできた多くの哀しみや悔いをやさしく時間をかけて消してくれると思えるからである。人の身体は、我々が思っているよりも優れた機能を持っていると信じたい。

《ヒマラヤへの道 13》

ガルムッシュ峰 5

梵店主

山では必ず事故は起きる。どんなに警戒していても自然には勝てない。事故が起きると仲間内で事故の原因や責任などでもめる。意見対立が仲間割れを招くのである。これは山のクラブであれば全ての人が経験する。クラブから離れる人の多くがそんなゴタゴタを見ているのである。長くいる者は、そんな事があっても辞めずにいるわけだから、それなりに精神的にタフだと言えるかも知れない。

よっちゃん達が登っている高山での事故要因は、雪崩とクレバスへの滑落である。同じように落石が致命傷になる。鉄砲玉のようにビューと音を立てて飛んでくる石ころもあれば、岩煙を上げて襲ってくるのもある。ヘルメットをかぶっていても当たれば唯ではすまない。

登るルートは慎重に決めなければいけない。出来るだけ安全で登りやすいルートを見つけ出すのである。初登頂を目指していて、わざわざ困難なルートを選ぶバカはいない。一番やさしそうなルートを考えるのだが、なかなかそのルートがわからない。下から見上げているだけでは見えないところも多く、ある高さまで登ってみないとわからない。

四千七百㍍のベースキャンプから氷河の舌端である急な氷壁を登り氷原を歩いて行くと、よっちゃん達が登ろうとしている山の南西稜が鋭く切れ落ちて小さな台地を作っていた。その先には今登ってきた氷河の何倍もある氷河が新雪をかぶって広がっていた。

よっちゃんら四人は、昨日にルート工作した道をたどってアタックキャンプ設営地を探し出すのと上部登攀の為のザイルや固定ロープなどの荷揚げの為の重いザックを担いでいた。ネパールと違い、シェルパがいないパキスタンでは全てを自分達でしなければならない。一人当たり二十五㌔を超えるザックを担ぐと空気が薄い事もあって早く歩けない。わずかな距離でも時間がかかる。

午後の二時頃になれば五千二百㍍にある氷河の上を流れていた小川が流れなくなり急に冷え込みだすので、早くベースキャンプへ帰幕しなければと皆で相談して担ぎ上げた荷をデポすることにした。大事な荷であるからなくなっては困る。落石の心配が少なく、昼間小川の水に流されないような所と考えて雪原の端にまとめて置いてカバーを掛けロープで括り付けて帰幕した。

帰りは早い二時間もかからずに帰ることが出来た。帰ればすぐにテントで待っているリエゾンに報告して直ぐに夕食の準備を始める。我々の食事は国内と同じようなメニューである。カレー、クリームシチュー、などにラードで羊肉とニンニクを煮込んだペミカンをたっぷり入れたものである。飯は圧力鍋で炊いたが美味くはなかったが、他に食べ物がないので文句を言わずに残さずに食べてた。よっちゃんは、いつも飯にお茶漬けのふりかけをかけ茶漬けにして食べていた。高度の為か食欲がなくて茶漬けにしてたらし込んでいたのである。他の三人は食欲は旺盛で残すことなく食べていた。

食事の準備から食後の後片付けまですべて細かい作法があって、綿々と伝承されてきているので、隊長も山猿達と始めての登山生活であったが、基本的には同じであるからトラブルは発生しない。登攀の際の声の掛け方、ザイルの使い方なども問題はない。違う山岳会のメンバーだと違うやり方であると打ち合わせしないと事故につながる。その点今回のメンバーは同じ会だから、要領の良し悪しということはあるが、互いの食い違いは起きにくい。

異聞・幻のストラディヴァリウス②

パガニーニのトリッキーな指さばきに、ソーニャはなすすべもなく、身も心も快楽の網に絡めとられていく。ソーニャの乳首を吸い、胸から首筋に舌をはわせ、唇を吸い、舌を吸い、口の中でころがす。

身をよじらせて張りあげるソーニャの歓喜の声は、開けはなたれた窓から外に漏れ、ロマたちの歌声の中に溶け込んで、消えていく。ソーニャの呼吸が激しく乱れはじめる。声を押し殺すように小刻みに息を吐き、吐きつくした次の瞬間、両足をつっぱり、けいれんさせながら絶叫した。

ソーニャの奥処(おくが)から湧いてくる雫が、パガニーニのたなごころから手首をぬらし、淫靡に光っている。そのぬれた手で、反りかえったみずからのカノンを握りしめ、ソーニャの門にあてがう。ソーニャは両手でパガニーニの腹を押して抗がう。抵抗は女の無意識の計算なのか、男のカノンはますます怒張を増した。ソーニャの手を払いのけ、奥へ奥へ挿し入れていく。上気したソーニャの体温がカノンをあつく包みこんだ。

パガニーニはソーニャの白く柔らかい肉体を、どこへも逃がさずつかみ締めてしまうかのように両腕で強く抱きしめ、舌を強く吸いながら一体感を高める。体を密着させたまま、腰を使ってソーニャの中でカノンを激しく動かしはじめた。パガニーニもまた快楽の深みに入っていく。↖

ひたすら性的陶酔をもとめ、互いの肉体をむさぼりあい、そのまま極まりきろうとする。

＊

ニコロ・パガニーニは十一歳のとき、生まれ故郷イタリアのジェノヴァでソロデビューをはたした。この天才ヴァイオリニストの評判はまたたく間にイタリア中に広がり、父親に連れられて、各地で公開演奏会を催し、サロンに呼ばれて天才的技巧を披露した。宮廷に招かれることもあった。

父親はどん欲なうえに賭博好きで、演奏会で得た大金を賭博につぎ込み、収入のほとんどは残らなかった。息子のニコロも父親の情熱を受け継ぎ、賭博にのめり込んだ。

やがて性に目覚めたニコロは女性との恋愛にあこがれるようになる。淫蕩な本性に目覚め、自分の体の底からその湧きあがってくる奔流に身を任せることによる肉的喜びを知った。自分の中に沸きたぎるあまりに激しい欲情にさいなまれることもあった。節度というものを簡単に超えてしまうからだ。

背が高くスマートな体躯、彫りの深い色白のマスクをもつヴァイオリニスト、この鬼才が奏でる魅惑的な音楽は、多くの女性を惹きつけた。十歳以上年上の貴婦人や十代の若い娘などさまざまな女性と関係をもち、彼女たちとの逢瀬に収入の多くをつかった。こうして十代後半は、ヴァイオリン演奏で得た莫大な収入を博打と女につぎ込むのである。

十八のとき、ニコロは自立する決心をし、父親のもとを離れた。だが、賭博と女への誘惑は断ち切れなかった。とりわけ性的情熱は過剰で、もてあますほどであった。

イタリア北部の港町リヴォルノで演奏会を開く直前のことである。ニコロはバカラで負けて、すべての金を失ったうえに愛用のヴァイオリンも取りあげられてしまった。その出来事を知った音楽好きの年老いた商人が、ヴァイオリン一挺をもってニコロのもとに訪れる。

「これはグァルネリ・デル・ジェズです。まだ一度も公開の場で弾かれたことがありません。ぜひあなたに弾いていただきたい」という。ニコロはヴァイオリンをとって、各弦をいろいろな調律で弾いてみた。すると、この力強く豊かな音量を生み出す楽器にすっかり魅せられてしまった。演奏会でこのグァルネリを弾いたのはいうまでもない。

演奏会を終えると、老人がニコロの前に歩み寄り、「これはあなたのものです。ただ、あなた以外に触れさせないと約束してください」という。ニコロは「約束は守ります」といって、老人の手に接吻した。

このヴァイオリンをニコロは「カノン（巨砲）」と名付けた。大胆なつくりのカノンが生み出す豊かな音量は、オーケストラのフォルテシモの演奏の中にあっても、ひときわ大きく鳴り響いた。

作品は作者の個性が反映する。カノンの作者ジュゼッペ・グァルネリ二世は、性格はわがままで短気、けんかをして人を殺めたこともある。作風は力強く剛毅、豪快で男性的である。カノンこそ、通称グァルネリ・デル・ジェズ（「イエスのグァルネリ」）のなかの代表作といってもいいだろう。

ニコロは約束どおり、生涯このカノンを愛用し、誰にも触れさせることはなかった。

リヴォルノの演奏会の翌年、ニコロは突然姿を消す。失踪するのである。日記にはただ「農園の経営に携わる。ギターを弾く趣味をもつ」としか記されていない。

ニコロはあるサロンで裕福な貴婦人と出会う。ピサの近くに居城をもつ若い未亡人マリーナである。その魅力に魂を奪われ、マリーナのもとに走ってしまうのだ。それはどうすることもできない必然のように思えた。彼女の城で愛欲の日々を送るのである。

ギター奏者でもあるマリーナのために曲をつくり、ヴァイオリンやチェロ、ヴィオラの作曲も手がけている。さらに、四年の歳月の間に技巧にいっそうの磨きをかけ、悪魔的といわれるほどの超絶名技巧をものにした。

マリーナ一人のためにカノンを奏でた。マリーナだけのためのカノンであった。マリーナへの愛は永遠だと思えた。

その愛に終わりがやってくる。住みなれた城を去るときがくる。ニコロ、二十二のときであった。

＊

ジャスミンの香り漂うソーニャの体が、夕日を浴びてピンク色に輝いている。性の饗宴の余韻に浸っているのだろう。薄目を開けた瞳は焦点が定まっていない。窓からは相変わらずロマたちのにぎやかな歌声が流れてくる。

ソーニャはふっと正気にかえり、恥じらいを取りもどしたように大きなショールで身を包んだ。

ニコロは、ソーニャの艶やかな姿態にマリーナの面影を重ねていた。

連載　京鹿子幻影　2

具志　清

二　嵐山

謹啓　御書簡有難く拝見致しました。

あの日、小生は阪急電車の嵐山駅で下車し天龍寺へ向かいました。暫く歩き小さな中之島橋を渡ると広場へ出ます。前方に、渡月橋の長い風致な姿が見えます。その背景は緑と白の模様を織り交ぜた雪景色の山々です。行楽の季節には人出で賑わうのですが、二月の平日は人影も少なくひっそりと静かです。この広場は大堰川の右岸に横たわる中之島です。その名の通り中之島公園と称し、嵐山公園の一部を成しています。

前の日の雪はやみ、空には処々雲が浮かんでいましたが、春近きを思わせる柔らかな陽光の中、小雪が舞っておりました。京都で時々見られる風景です。遠くの北の山野に降る雪が風に煽られて来るのでしょうか。昔の人は「風花」という名を付けてくれました。「かざばな」とは、なんとも風雅な言葉ではありませんか。

貴女を、その風花の舞う中に見かけたのです。

砂利と土と雪の入り交じった広場に踏み入れた時、十間ほど先の川岸に佇んでいる貴女が、直ぐに目に留まりました。和装の後ろ姿が印象的でした。流れを見つめている御様子でした。小生は貴女の背後を通りすぎながら渡月橋の方へ歩を進めました。

貴女は、この橋の南詰めから広場へ降り堤を下ってきたのですね。小生は北へ渡りつつ、欄干越しに貴女の方へもう一度目を向けました。いや、どうも、じろじろと観察したみたいで恐縮ですが、決してそうではなく、何となく貴女の姿に惹かれたのです。

このあたり川は東へ流れますが、やがて南へ折れ、十八キロ程先で宇治川、そして木津川と合流し、淀川となって大阪湾へ注ぎます。遥か東の方に比叡山が霞んで望見されました。

それから一時間程して、天龍寺宗務本院での所用を終え、方丈の石段を降りた時、小生は、法堂（はっとう）の角から姿を見せた貴女と、出会いました。

貴女は会釈しながら近寄り、庭園の拝観入口を尋ねました。右手の方のそこを指し示すと、丁重に謝辞を述べられ、入口の方へ行かれました。小生も返礼し山門へ歩きましたが、すぐに杉の木陰で振り返りました。

貴女は、拝観入口へ入る前に、大方丈の結構を見上げていました。

京都五山第一位の寺格を誇る、臨済宗大本山天龍寺の大方丈は、京都に数多ある寺院建築の中でも、その風格と気品の秀逸さは、称賛に値するものの上位にある、と小生は思っております。黒褐色の梁と束とが白壁を縦横に区切って織り成す幾何学的構図が、先ず、観る者をして、禅林の厳粛な雰囲気を感じさせます。そして降り棟と破風板の稜線が左右から天頂の拝みへ反って上る様は、両脇に茂る松の枝振りと、心にくいばかりに美的調和を示しています。

この大方丈の宏壮な姿に接すると、小生は、洛北の玄琢あたりから望む比叡山の雄大な山姿へ想いを馳せます。大自然に対峙し、遜色のない人工美の一つの典型だ、と思うのです。

松や杉や桜木が節々に雪を載せた枝の重なりの下から、小生は、貴女の後ろ姿を暫く観ていました。今時分、若い女性が独りで寺院や庭園を拝観して歩く事に、興味を感じました。ほどなく貴女は庭園の門の中へ入って行きました。

山門近くの京福電車の嵐山駅前でタクシーに乗り、次の訪問先の大覚寺へ急行しました。用件を済ませると、待たせてあった同車で駅前へ戻りました。空はすっかり晴れ上がり、風花は消えていました。小生は、駅近くの食堂で昼食を摂った後、改札口近くで、貴女と、また出会ったのです。

貴女は、あらっ、と、微笑されました。鶯色のショールを折りたたんでハンドバックと共に抱えていました。千代田襟の浅葱色の和コートがよくお似合いでした。

束髪の貴女を観て、小生は先刻来、黒田清輝の名画「湖畔」を思い起こしていたのです。もつともあの絵の季節は夏です。

青い湖水の石積みの岸に腰を下ろした束髪の妙齢な女性は、対岸のかなたの緑の山へ視線を送くり、団扇を右手にした浴衣姿です。その束髪は後頭部が小さくこんもりとしています。

貴女の束髪は、すっきりと丸く、両耳の上部を覆っておりました。黒田清輝は、多くの束髪の女性を画きましたが、その中の一人が、小生の目前に立っているような気がしました。

貴女は龍安寺へ、小生は妙心寺へ、方向が同じである事を知り、小生は、途中までの同行を、申し出、貴女の同意を得ました。帷子の辻で乗り換え、竜安寺道へ着く二十分程の間、嵐山や天龍寺の事などを話題にしました。

竜安寺道駅の側の踏切をよぎる小道で、貴女は北へ、小生は南へ、と別れました。小生は妙心寺駅で降りるのが便利ですが、一つ乗り越しました。小生は、お別れする時、思い立ったように名刺をお渡ししました。今朝東京から来て、明夕には帰る。季節はずれ

どの慌ただしい、女の一人旅に、老婆心ながら、何かありましたら、電話でも下さい、という気持ちでした。

貴女が歩きゆく小道の前方に衣笠山の丸い頂きが見えます。和コートに覆われた御召物は鹿の子絞りでしょうか。裾の、藍地に白の文様が、雪道の上を静かに揺らぎつつ遠ざかって行きました。

貴女のお姿が見えなくなってから、お名前をお尋ねしなかったのを悔いておりました。

それから三ヵ月ほど経った先日、夕刻帰社すると机上に封書が置かれてありました。

里見京子さん、はて、誰だったかな、と思いつつ開封した次第です。

いや、驚きました。というよりは、有難く思いました。

御書簡を読んで考えました。現在の貴女が幸福であるか否かは、小生には軽々しく論ずる事は出来ません。唯、亡き御両親への、貴女の限り無き追慕と、それを糧とする御自分の生への賛歌が、小生の胸に激しく迫って参りました。

御一人で寂しい時もあるでしょうが、どうか、前向きに快活に、日々をお過ごし下さい。

乱筆乱文にて失礼致しました。

敬白

死から生への問い　人生と何か

祖蔵　哲

「何のために生きるかどうかはすでに与えられている」「あなたを必要としている何かがいてそれは発見されるのを待っている」「意味は時の要請である」「人生の意味は作り上げるものではなく発見するもの」等々。アウシュビッツ収容所での体験は特異なものかもしれませんが、しかし考えてみれば通常の人生も同じようなもの。死は確実にやってくるしまた不条理でもあります。どのような状況であり重要なのは自分自身の世界観が重要であるとフランクルは言いたいのでしょう。

さて、現代をみてみると最近の急速な情報化社会の反動として何事にも比較しなければ生きていけないと言う人が増えています。彼らは極端に狭い閉じられた閉塞世界に生きているのです。このような人の中にも「求め、悩みぬき」その先に世界が広がったという体験をしている人が多いと聞きます。宗教家ではないのにそこまでしなくてもと思いますが、やはり最終的には比較や欲求だけだは限界があるということを早く悟らなくてはいけないと思います。そういう意味ではフランクルのいう「今、そこにその足元にあなたに発見されるのを待っている何かがある」という考え方は短い人生に無限の可能性を与えているような気がします。

そもそもこのフランクルの思想は多分にユダヤ教の考えが入っているように思います。それはこの世のすべての創造物は神が作ったものであるというものです。そしてその創造物を知ることは神を知ることに通じるということであろうと思います。だから自然の方から人間に発見されるのを待っているのです。このことは近代科学がなぜ西欧で発達したかを解く重要なキーでもあります。

話が若干逸れますが、そもそも近代科学は西欧でのみ発達しました。確かに火薬や紙の発明や数学の発展など東洋の方が優位なときもありました。しかしながら東洋の考え方の根底には自然をありのままに見るというものがあります。また政治的に個人が権力を握る専制型が多く研究というもの自体が国家的に管理されていました。しかし西洋の方は早くから一定の制限はあるものの個人の自由はあり、またユダヤ教から発展したキリスト教とくにプロテスタントが自然を研究することは神の意思を知ることであるという解釈をしたために一気に発展をしました。脱宗教を目指した科学がかえって宗教的になっているというのはなんとも皮肉です。私たちも普段太陽の周りを地球が回っているというようなことは体感できなくとも科学的証明でなんとなく信じているというのはまさしく宗教とかわりないのでしょうか。

人の死というものがどういうものかを考えていく中で人間の人生がどういう意味を持つものかを考えてきました。人間とは「知る」ことを欲する動物であるということは文中で述べましたが、何かのきっかけで理由を求め、また新たな疑問が出てくるこれがまさに人生の側から問われているということでしょう。本稿の場合は私自身の母の死が問いを発したのです。答えるべきは私自身でありましょう。

完

俳句

藁女

○ 栗ごはん似ているかしら母の味

○ なつかしや芋の茎あり道の駅

○ 気ぜわしく齢重ねて衣かえ

○ ひっそりと冬芽つけたる牡丹かな

○ 珈琲の湯気の先にいわし雲

義兄とその家族（10）

末期に近い（と思われた）肺ガンから、ひとまず生還した義兄は、現在も休職したまま、療養生活を送っている。最先端医療を手がける「CSクリニック」に週に2回通い、姉の徹底した食餌療法を受け、夜は10時に寝る暮らしで、健康な人とほぼ変わらないぐらいのところまで元気を回復した。

「9月の初めぐらいからかな、昼間に『シンドイから寝る』ということがなくなってん」と姉。

だから、そろそろこのタイトルの投稿も終わりにさせていただかなくては、と考えていた。というのは書き始めたとき、これは姉と義兄の「悲しい話」だと、何となく思っていたのに、幸いにして義兄は回復し、平凡な一家の平凡な幸せが戻ってきて、このまま書き続けると、読者の皆さんは「それはよかったね、だからどうしたん？」と思われるだろう、と考えたからだ。

ほかの人はどうか知らないが、少なくとも私は「こんなに、幸せなんです」というような他人の文章はキライである。たとえば、ブログとやらで、「今日、こんなところへ行って、こんなお昼のランチを食べました」なんて、ご丁寧に、スパゲティーとドリンクの写真を載せていたりすると「それが、どうしたん？」と思う。もちろん、それがチベットの山奥で食べたランチだというのなら、他人に言いたい気持ちもわかるが、西区の住民が天王寺で食べたモノなど、「これが5円ぽっきりです」とか逆に「12万円のランチです」という以外、わざわざ書くなと思ってしまう。もちろん、作家の書くもののなかには、そういうささやかな幸せを描いて秀逸というものがあるんだろうけれど、シロウトが山あり谷ありなしの幸せを書いても、自慢話めいていて読まされる方はゲンナリするだけ。書くのは勝手だが、私は別に読みたくない。

そんなわけで、オシマイにしなければと思っていた矢先、姉から電話がかかってきた。義兄の再発ではない。姉自身が急性化膿性歯髄炎にかかったというのだ。

「いや、もう大変やってん。寝ても、起きても痛いねん！」。当たり前だが、歯医者さんに飛んで行ったらしい。姉は健康オタクなので、歯科医も何軒も渡り歩いて（姉には悪いが、姉はちょっとした歯医者のクレーマーだ。行くところ行くところ、「あそこは歯をガタガタにする」とか「削られてエラい目におうたわ」と文句ばっかり言っていた）、とうとう古市にある「斎藤歯科医院」にたどりついた。斎藤先生を信頼しきっている姉は、夫である義兄はもちろん、妹の私も、弟もこの歯科医院にかからせている（私は大阪市内から1時間かけて通っている。でも、その値打ちのある先生で、強引で世話焼きの姉をもつといいこともある）。

その斎藤歯科に姉はほうほうの態で向かったらしい。「治療も待ち時間も長いやろうから、○○（義兄の名前）を待たせるのも可哀想やと思って、自分でやっとこさ運転して行ってん」。

もう少しで歯医者に着く、というところで義兄が姉の携帯に電話をかけてきた。「何かと思ったら、『帰りに、すぐに食べられるモン、なんか買うてきてな』やて。わたし、プッツンきましたデ」と姉。「ヒトが歯が痛いって、うんうん言いながら、車を運転してんのに、ほんまに自分のことしか考えてへん」。

義兄は歯の性が悪いというのだろうか、いつも歯医者にかかっているようなところがあって、そんなときはいつも姉が運転して「付き添って行ってやってたのに！。ヒトがこうなっても、自分の食べ物買うて来いって。あきれるやろ！」と怒りまくって言う。

「アイツ（自分の主人のことだ）はハクサイを噛んでて歯が折れたぐらいやから、私、プロポリス（ガンに効くとされるサプリメントだ）もいつも包丁で切って、渡したってんねん。というのも、『これは、ポリポリ噛んで飲み込んで下さい』と店の人に言われたのに、ポリポリ噛めないって言うから。それで、砕いたったら『かえって飲みにくい』と言うから、今度は4つに切ってみたら、こなごなになってしもて、それで2つに切るようになったんやけど」。つまり、義兄の歯のために、日々こんなに苦労してんのに、と言いたいらしいが、聞いている方は笑ってしまう。

「ハクサイ噛んでて折れる歯」って。

姉の歯は名医・斎藤先生が「これは私も全神経を集中してかからんとアカン状態や」と言われ、その通り、全神経を傾けた治療をしてもらったようだ。

後日、「私が通っている間に、アイツも自分の歯の治療をしててんけど、ひょっとみたら、アイツだけ、治療後も診療台に毛布みたいなものを掛けてもらって、ちんまり寝てんねん。肺ガンやってことを先生に言うてあるから特別扱いや。なあんかハラ立ったで。先生の配慮は嬉しいねんけど」。そんな姉と義兄の、平凡な日常。「それがどうしたん」ではあるのだが。

（つづく）

サラリーマンエッセイ33
「サラリーマンとしての自省」

明石　幸次郎

早めに会社を退職して、自分が多少温めていたアイデアを仕事に結びつけ、起業化しようとしたが、世の中はそんなに甘くない処か、応援してくれるはずの会社も業績の急落で遂に倒産してしまいました。3年前にこの会社の創業社長Tさんと台湾で合流して2日程、一緒に原材料の調達先を回りました。兎に角、T社長の強気の交渉と説得力で商売上手の中国人相手に契約を次々に決めて、創業社長の決断力と度胸の良さに、元サラリーマンなどの私など、足元にも遥かに及ばないと感心していました。取引先の大手銀行の支店長も融資の関係で同行してのこの出張はこの社長にとって実り多いものとなったようで、帰国して暫くして会った時、何億の調達資金も銀行から借りられ、事が上手く運んでビジネスは大成功であったと、これも支店長を連れて行って自分の仕事ぶりを見せたことが良かったと――。今度は、明石さんの頼みを聞くので又、会おうと自信満々の態度が満ちあふれて、この人が引っ張っていく会社も今後も隆々だろうと思っていました。

それから何回かこの社長と飲みに行ったりして、私の仕事の助言など聞かせて貰っていましたが、翌年2008年9月に起きたリーマンショックが切っ掛けで、取引先の自動車部品メーカー数社からの発注量が、一気に当初計画していた量の半分近くに減らされ、そのため海外から強気で調達した原材料は膨大な長期の在庫となって、逆に裏目に出てしまいました。その決済などの資金繰りに追われて、銀行との返済交渉など、事業運営が今までの得意のそれ行けドンドンの攻めから、一挙に倒産を防ぐという不得手な守りになってしまいました。そして、今年の夏頃に万策が尽きたのか、知り合いからこの会社が倒産したと聞かされました。30年近くの創業以来、何度かの不況の波は被って、その都度、T社長の才覚で乗り越えて来ましたが、今回のリーマンショックは、誰もの予想を超える規模の需要減となり、この社長をしても銀行も取引先も助けてくれず、どうしようもなくなって、とうとう身を切る思いで、会社を清算してしまったと思われます。今年65歳を迎えたT社長の、つい3年前の台湾での事業家としての自信に溢れた姿が今でも印象に残こり、その姿に惹かれ少しでもこの人に近づけたらとの思いを抱いていただけに何とも言えない心境です。

私の方は、創業しようとした矢先のこの不況で思うようにならず、初心貫徹の努力も途中で放棄しかかり、宙ぶらりんの不安定な状態になっていた矢先にコンサルタントをしている知り合いから声がかかり、今は第2のサラリーマンに舞い戻り、それから一年半にならんとしています。可笑しなもので最初は、3ヶ月ほどで辞めるつもりが、今は何となく会社での居心地が良くなって来ています。これは、明日倒産するかもしれないと今、全力で頑張る創業者とは全然違う、責任の無いサラリーマンの緊張の無さから来る気楽さが会社での居心地の良さに繋がっているのでしょう。こんな社員を多く抱えている会社はいつ倒産しても可笑しくないほど、世の中の経済状況は厳しいものになっています。

ついつい気楽になりがちなサラリーマンを奮い立たせて、如何に緊張感を持たせて、責任と目標を与えて良い仕事をさせるかが、今も昔も経営者の一番重要な仕事となっていますが、今居る会社の社長は残念ながらそれに欠けています。大丈夫なんか――、そんな他人事みたいなことを言ってもらっては、明石さんを推薦した甲斐がないやないか！　と言うコンサルタント氏の声が聞こえてきそうです。

携帯エッセイ25
「座右の銘」

私には座右銘がたくさんある。とくに次の四つは気に入っている。

一つは『勇気と希望とサムマネー』。チャップリンの言葉だ。「生きるには勇気と希望が要る。そして生きるに足るわずかなお金と」というぐらいの意味だろうか。この言葉に出会ったのは27歳の頃。ある老人から教わった。初めて聞いたときに耳に焼き付いた。

二つ目は『急がば回れ』。目標に向かってまっしぐらに進みたい。しかし、色々と行き詰まるのが世の常。そんな時は無理をせず遊ぶにかぎる。人生には道草が必要だ。

三つ目は『日々新た』。毎日ひとつ、何か新しいことをする。なんで良い。いつもと違う道を歩いたり、いつもと違う店で食事したり。新しいことをすると必ず新たな発見と驚きがある。それが自分を豊かにしてくれる。それを書き留めて置くと、なお良い。日記のように。

四つ目は『災い転じて福と考える』。「考える」は私の言い換えである。困った事や嫌な事でも見方を転じれば良い様に考えられる。私はこれまでに二回転職した。どちらも嫌な職場だった。しかし、そのお陰で今日の職場に巡り会えた。今は日々、楽しい。《龍》

連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

人の役に立つということ

自分の存在確認を「誰でも人の役に立つことが百以上出来る」と言うけれど、やろうと思えば出来るのかなァ。

突然のペンキ屋さん来訪、犬の散歩をすませて何気なく納屋の屋根の人を見る。

ほほかむりし、帽子を腰にさげて、手は刷毛をにぎり一心にペンキをぬっている。

ハテナ、頼んだかなァ。

今日という日を忘れていたのかなァ。

いよいよ物忘れが始まったのか、とがく然とした。勇気を出して「どなたさんですか……？　ペンキ塗りたのみましたかいな」

おそるおそるたずねてみたら、ほほかむりをとって真っ黒けの顔がニューと出て、白い歯を出して笑って言った言葉。

「えらいすんまへん。たのまれてもないのに、家の仕事のペンキが余ったので、勝手に、ハゲてる屋根を見て塗ってまんねん」

と言う。よーく見ると犬の散歩でいつも気持ちよく声をかけてくれる顔見知りの人だった。ヤレヤレ、よかった。知ってる人で。

つまり地域社会、近所とのつきあいなどは、急に出来ないもの、そこに住み始めた時から、やっていかなければ出来ないことだ。

六十年も住んで居れば、たくさんの人たちとの交流も出来たおかげで、あちこちから声をかけて下さり、ボランティア精神を発揮してくれる人も大勢いることに感謝している。

七草から

嬉しいことや、悲しいことや、色々なことが折り重なって人生は深まっていく。実英さんの言葉。

秋とはいえ突然の寒さがやって来て震え上がりおびえてしまう

おいしい味覚に何かと楽しみが多い季節、日頃の慌ただしさを忘れて、ぼんやりと

まあるい月を眺めてみる…そんなひとときもいいものです。

商店街を歩いてつと上を見ると、ススキ、柿などがさし込んである。なんだろう、月見を表現しているつもりなのか。大分疲れを見せているけれど、何の意味もなしにあの高い場所にさしてあるとは思えないけれど、ススキの意味は…。

ススキのその鋭い切り口が魔よけになるとされ、月見の後、軒先につるしておく風習。「尾花（ススキ）」は七草の一つ。月見団子は、月と人とのつながりを強くなるという縁起のいいお供え物。

「萩」。秋に咲く花。お彼岸のおはぎは、この花に由来するとのこと。

「撫子」。愛児を失った親がその子の愛した花を形見として撫でた事に由来。日本女性の代名詞は大和撫子。

「女郎花」。上品な黄色い花。淡い黄色は男女郎花。

「藤袴」。香りが強く、貴族達が湯に入れたり衣服や髪につけていたとか。

「桔梗」。開花期は夏なので夏の着物によく描かれている。

「葛」。茎でかごや布を織り、根から採取した澱粉が葛湯となり、漢方薬の葛根は根を乾燥させたもの。

老人を見る目の誤り

朝ご飯に何を食べたかを忘れるのは老化。食べたことその事を忘れるとボケ。

医者が勝手にもっともらしく分類しているが私は納得がいかない。まだそこまで自分にわからないのかも。

物忘れというのは、コンピューターではない人間の宿命じゃないのか。苦しい事も悲しい事も忘れていく。それで生きていけるのだと思う。戦後は年寄りにとっては新しい体験だらけで今まで生きて来たけど。

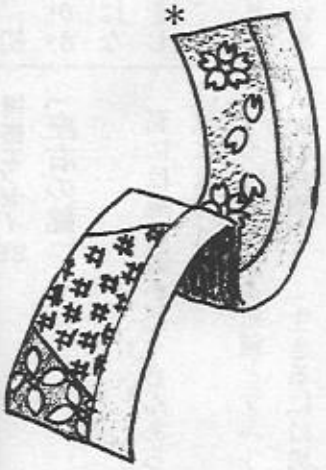
編集後記

◎訂正とお詫び

前号の『京鹿子幻影』に訂正があります。２段目８行目「戦地へ赴く」は「戦地へ征く」に訂正。３段目、手紙の末尾に差出人「北越直人」が抜けておりました。

四十六号の編集後記で先輩行きつけのスナックのママさんを、威圧的で男を見下したような印象を与える文面を書きましたが、本当は大変優しくて丁寧な接客をされています。また本誌の熱心な読者でもあります。今後は表現には細心の注意を払うべしと肝に銘じ、お詫びの言葉といたします。（嘉）

『人気のデザイン』４
スカーフ
着物地で服を作った残り
布で作るスカーフは
肌ざわりもよく暖かく
好評です



着物から服を仕立てます
梵～ぼん～